

# えぽっく

八重洲古書館  
RETRO REVALUE RECYCLE

創刊 6 号  
2000年8月31日発行  
中央区八重洲2-1  
八重洲地下街  
TEL033272-2888

## 坂口安吾・未完時評

数年前に入手しました『わが施政演説』という題の未完時評(400字詰原稿用紙7枚)が八重洲古書館にあります。「墮落論」「不連続殺人事件」等で知られる坂口安吾(1906~1955)が1947年頃書いたものと推測されています。この作品については、共同通信社のスタッフが調査し、日本経済新聞(8/17朝刊)に紹介されました。

代議士の子息として政治の世界に何らかの関心があったのかもしれませんが、1947年に山本有三氏・中野重治氏が参議院に当選した直後に書かれたのではないかと、文芸評論家の関井光男さんが推定しております。この作品は、全集にも収録されておらず、未発表です。未完であるから全集に掲載する価値がなかったのかもしれませんが、内容的にはかなり貴重なものであると思います。戦後の安吾の一面を知る事が出来る内容です。

坂口安吾に興味有る方、小説家の生き方に興味有る方、この時代背景に興味有る方、八重洲古書館で見るだけならタダです。是非自筆原稿をご覧ください。

『日本の古本屋』に所属する古書店はこのような文化資産を当たり前のように商品として扱っています。日常的に、図書館、文学館、美術館、郷土資料館等に資料・書物を納めているのですから、納めるまでは店頭で陳列されているのです。しかし、一度そのような機関に納まると、皆様は入場料を払って見せてもらうことになるのです。

ここで、皆様にお勧めすることは、金井書店&八重洲古書館をはじめ、日本の古本屋の古書店を活用されて、『日本文化』を吸収していただきたいと思います。本を買う買わないは気にしません。色々な書物に触れていただければそれでよいのです。

我々は、営業活動をしているのですが、押しつけて販売することは致しません。読みたい本があれば自分のものにしてください。心惹かれた書物があれば独占してください。八重洲でお愉しみいただければ幸いです。

八重洲古書館店長 渡辺明子  
金井書店八重洲店店長 川上亜衣子  
スタッフ一同

## スタッフのメッセージ

先日、いつものように仕事から帰り、テレビをながめていたら『今日は皆既日食です』とアナウンサーが言いました。

これが見られるのは、私がいきているうちでは最後のチャンスということを知り、いちど外したコンタクトレンズを再び付けて、外に出てみました。

月の見えるところまで歩きながら、「この感じはずいぶん久しぶり」と気がつきました。人もほとんど眠りにつき始める時間の、静かになった夜の住宅街の空気。夏といっても、夜の空気は少し澄んでいて、風も程よく吹いていて、部屋に居るよりもずっと快適です。思えば学生の頃は、夜、よく散歩に出ていたものです。

空にはいつもと違う月、もう二度と見ることでできない月。そんな感慨もそこそこに、私は、散歩のよこびを取り戻し、歩くことに夢中になっていました。軽い荷物で、楽な格好で、手も足も伸び伸び楽しんでいる感じ。歩いているうちに、小さい悩みなら消えてしまうし、考えごととも前向きな方向へ進んでいきます。

歩いていると、いつまでも歩いていけそうだなあと思うのですが、そのうち「もういいかな」というときがボンとやって来るのは不思議。この間、そんな潮時が訪れたのに道に迷ってしまい、ちょっとした肝試しとなってしまうました。それでも家にやっと辿り着いた時は、寝る時間まで結構余裕がありました。

働くようになって、自分の時間が減ったなあと思っていましたが、意外と時間は余っているものだ気がつきました。

そう気づいたら、時間を持て余してしまうのが私の悲しいところ。しかし、何もすることがないということは、今の私の場合ありえません。常に『部屋の掃除』という課題が残されています。掃除が趣味、といえる日がいつか来ればいいなと待っているのですが...

八重洲古書館 千葉桂子

最新情報はインターネットホームページをご覧ください。  
<http://www.kosho.co.jp/>

読み終えた本、昔の本をお売り下さい

ご意見ご感想ご提案をお待ち申し上げます。  
下記宛にお寄せ下さい。

金井書店営業本部  
〒161-0032 東京都新宿区中落合42116  
FAX 03-3953-7851  
E-mail: office@kosho.co.jp

20世紀懐古館

# 写真と絵葉書



(長崎通商館) THE CUSTOM HOUSE, AT NAGASAKI. 通商館



Yajima Takamasa Shrine 長崎市中野町通商館 (河原田製紙)

者かつに夏か過ぎ、少しずつ涼しくなってくると、それまで億劫だったことが、やってみたくになります。そのせいか、秋になると、にわかに、スポーツの秋、とか、芸術の秋、などと、様々な文化が注目されはじめます。

ひとくちに、文化や芸術、といっても、様々なものがあります。特に、現在の発達した文明下においては、昔は芸術とは認められていなかったものも、市民権を得、芸術と云われるようになっていきます。しかし、ある程度以上の歴史を持つ文化や芸術ということになると、決してその多くは存在しないのではないかと思います。その中で、長い歴史と懐の深さを合わせ持つ、『写真』にスポットを

当て、数ある写真芸術において、最も身近にある絵葉書を切り口に、この度の“20世紀懐古館”を纏めてみました。

写真の始まりとなると、写真史家の間でも、未だに諸説まちまちのようで、議論が繰り広げられており、これと決定することは、非常に難しい状況です。ただし、一般的な定説としては、1839年に、科学アカデミーにおいて発表報告がなされた、ルイ・ジャック・マンデ・ダゲールの“ダゲレオタイプ”をもって、現代写真術の発明とされているようです。そして、わが日本にも、そのわずか2年後の1841年には、オランダから長崎を経由して、薩摩藩の島津家に献上されたといわれています。実際に実用されるに到ったのは、それから20年ほど後のことになるのですが、幕末から大政奉還に到る時代の動乱期に、これ程早く最先端の技術が輸入されていたというのは驚くべきことです。

現在でこそ、カメラは、ごく日常的に存在しますが、当時の社会への影響は、まさに「事件」と呼んで差し支えることはない程でした。肖像からスタートした為、画家からは不正競争を訴えられ、宗教家たちは、神への冒瀆を叫んだと云われています。日本においても、本気で魂を吸い

取られると信じていた人々が多く存在していました。

写真は、その発明された当初から、絵画と密接な相互関係があったために、営業写真といわれる、いわゆる肖像写真の



川口通商館古平通商館跡  
The Present Phase of Isahaya



寺 長崎(長崎)

Isahaya - Gihon Photo



類いを別にすると、絵画主義的な作風の強いものがつくられはじめます。日本において、20世紀初頭にもっとも浸透したのが、こうした絵画主義的な芸術写真でした。これは、アマチュア写真家達の興味の対象となり、それを目的としたクラブの結成なども、行われます。しかし、それとは別に、報道においても写真は活躍しており、特に、戦争の記録写真は、膨大な枚数が残されています。その後、アマチュアの写真熱は次第に強くなってゆき、日本写真会の結成等により、さらなる発展をとげます。絵画の影響を脱した、新たなる芸術写真も出始め、『アサヒグラフ』の発刊などにより、グラフィ

ジャーナリズムも本格的にスタートします。

今回の展示の中心である絵葉書も、一般への写真に対する普及と切り離してしまうことはできません。写真は、そのリアリズム性において、なによりも優っています。記憶の再生や、経験のないものへの想像力を助長させてくれるものとして、写真ほど有効なものはありません。その点で、風景や建物中心とした絵葉書は、まさにぴったりです。過去に旅行した土地の絵葉書を見て、その思い出を反芻したり、まだ訪れたことのない場所の絵葉書で、そこに立つ自分の姿を思いみる、といったことは、誰にでも、一度は経験のあることではないでしょうか。

この絵葉書は、写真技術の発達だけではなく、印刷技術とも密接な関係があります。初期のものは、どこか平面的な、平べったい感じを受けたりしますし、カラーの写真でも、その色合いが、なんとなく不自然に感じてしまうのは、こうした二つの技術力の部分で、まだまだ未熟だったということでしょう。しかし、その技術力の向上目覚ましい現在においては、モノクロかカラーかといった違いについては、純粋に好みや撮影対象との相性が問題になるだけ、といっても良いのかもしれませんが、もちろん、技術が向上した為に、それまでモノクロでしか写したり、現像したりすることが出来なかったものが、現在では、ほぼ実物と同じ様に、カラーによる表現が出来る様になった、ということは事実です。しかし、それでもなお、わざわざセピア色で現像させる為のフィルムや、モノクロ専用のフィルム、といったものが販売され、また人気を集めているということが、その証左ではないでしょうか。実際に、人物を撮る場合は、モノクロの方が難しいが、美しく写る、と聞いたことがありますし、私自身、あのセピア色の写真の色合いが、なんともいえず好きだったりします。



では、その写真を写す、カメラそのものですが、第一次世界大戦前後には、蛇腹の折畳み小型カメラが一躍ベストセラーとなります。現在、日本の中古カメラの市場で、売買されている骨董的なアンティークカメラは、この時代以降のものということになります。現在でも中古カメラは、熱狂的なファンが多いのですが、そうではなくても、ライカやニコン、ローライ、ツァイス・イコン、キャノンといった一流ブランドの名前を耳にしたことがある人も、多いのではないのでしょうか。こういった、精密機械は、日本の最も得意とする分野ですが、日本が、戦後の高度成長期で、めきめきと頭角を表す前は、カメラと云え

ば、ドイツの独壇場でした。先述した、ライカ然り、ローライ、ツァイス・イコン然り、です。中古カメラの多くは、ドイツ製品か、日本製品ということになります。

冒頭にも述べましたが、涼しい風の吹きはじめの秋は、様々なことに、チャレンジしなくなる季節です。なんとなく、旅行をしたくなる人も、多いのではないのでしょうか。今回の展示の絵葉書は、風景や、旧跡・名所が中心です。こころ惹かれる場所に、今度は自分のカメラを持って、旅してみるのも、楽しいことかもしれません。カメラについて、写真について、そして、絵葉書の場所などについて思いを馳せ、心動かされる何かが皆様に訪れることがあるならば、幸いです。

(文責 :川上亜衣子)

展示場所：金井書店八重洲店 & 八重洲古書館  
開催期間：2000年9月1日(金)～9月29日(金)